

角 川

外来語辞典

荒川惣兵衛著

K
41.5725072
476
5.2

角 川

外来語辞典

荒川惣兵衛著

DN 100/10



角川外来語辞典

定価 2000円

著 者

荒川惣兵衛

初版印刷 発行

昭和42年9月25日

26版印刷 発行

昭和44年7月1日

発 行 者

角 川 源 義

製版印刷

凸版印刷株式会社

製 本

鈴木製本株式会社

製 函

川合紙器加工所

本文紙

本州製紙株式会社

クロス

日本クロス工業

発 行 所 かどかわしよてん
株式会社角川書店

東京・千代田・富士見2-13

郵便番号 102

振替口座東京195208

電話 東京(265)7111

序

一つ一つの単語は、民族文化の種子である。外来語の一つ一つは、民族が取り込んだ外国文化の種子であって、これによって、われわれは、如何に外国文化を取り入れたかを跡づける重要な資料である。

荒川氏は、さきに『日本語となった英語』を公にして5千語を発表して学界に知られ、更に、昭和16年刊行の名著『外来語辞典』1巻をもってその名を不朽にされた。

人間、一つの仕事に一生涯をかける覚悟なら、必ず、一応は、まとまったことが、きっと出来るものだ。16年刊の辞典の程度なら第2、第3の荒川氏の出現必ずしも不可能ではなからう。

併し、この度の大外来語辞典に至っては、そうそう、余人に企て及ぶ程度のものとは全く違う。

限りなき、凡そ日本の古来の文献という文献に、一語一語を、丹念に、克明にあたって、一句いやすくもせず、あらゆる用例を、忠実に、原文通りに挙げて、片言隻語も、いやすくしない、その良心、ページをひもといて、一行一行、あっと心を打たれ、驚嘆し、嘆美し、ただただ驚くばかりである。何百何千の学者が世に在っても、これほどまでには、よも行くまいと頭が下がるのである。

我々の日本語の研究も、こうやって外側方面の一角は、実に氏によって、完全に明らかにされた。外側のこの精密・精嚴な研究を得て、この研究にそぐうばかりの、国語の内側の研究が要求される。

即ち、荒川氏の今回の大著は、国語の外側の一面を大きく切り開いて、今後の内側のより深い研究を促す莫大な力作であることを有り難く思う。

昭和42年7月18日

金 田 一 京 助

30331

はじめに

本辞典は1941年(昭和16年)度の岡倉賞をいただいた富山房版『外来語辞典』の増補改訂版である。1930年(昭和5年)に出した『日本語となった英語』以来40年になんなんとし、同系統のものとしては第5作*にあたり、わたくしのおそらく最後の決定版であろう。

本辞典でいう外来語とは、(1)古今の外来語プロパーと、(2)漢字音を訓とした語、すなわち漢字音でありながら、やまとことばと思われがちな、いわばかくれたる外来語を含む。明らかに中国語とわかるものは、これも外来語であることはいうまでもないが、本辞典ではこれは省いた。また、本辞典は最新の流行語はもちろん、古語・魔語も採録する。

さて、外来語プロパーは、原則としては、文化語・専門語にきわまるものであるが、本辞典では、一般大衆に関係の少ない、したがって、用のない専門語は省く方針をとった。一般大衆も知っている語、または、知りたがっている語、もしくは、知らねばならぬ語、知ってもらいたい語をめやすにして選んで収録した。つまり、本辞典でいう外来語とは、国語化(nationalization)プラス大衆化もしくは通俗化(popularization)した語をさすのである。いいかえれば、本辞典収録の語は、専門学者本位ではなく、一般大衆の常識を標準として選んだものである。だからといって、学問的標準はみじんもひききざてはいない。そして一般大衆の常識にひきずられることなく、その向上を願ったものである。

かくて、わたくしが、現代最高のモラルと信じるところの、大衆への奉仕が、はからずも実現したことは、わたくしにとって大きなよろこびである。

第2次世界大戦は、1945年(昭和20年)、日本にとってははじめての敗戦、しかも歴史上空前の日本の敗北と被占領に終わった。アメリカによる日本占領とともに、まず米語(英語)が公用語となると同時に、ちまたには「バングリッシュ」が横行し、かくて、外国語、とくに米語は、植民地の常として、せきを切ってとうとうと流入し、目をそむけしめるものがあつた。(戦後近々20年間に輸入された新外来語は本辞典収録語の総数中、実に約半数をしめている。) いっぽう、わたくしは旧原稿 200字詰 20万枚近くを戦火に失ったし、また同時に、10人の家族が餓死をまぬがれるため、life ではなく living の生活と戦わねばならなかった。

* 日本語となった英語	自家版	1930年
日本語となった英語(改訂版)	研究社	1931年
外来語辞典	富山房	1941年
外来語辞典(アテネ文庫)	弘文堂	1955年

敗戦直後、市河三喜、金田一京助両先生から、外来語研究続行への切々たる御懇通（しょうよう）にもかかわらず、わたくしは外来語どころではなく、約10年の歳月は生きた心地もなく空しく過ぎ去ったのであった。

もっとも「光に関する研究」の原稿を犬にひっくり返されてストーブで燃やされ、ふたたびあらたに筆を起したニュートンの故事、フランス革命の原稿を紙くずとまわがえられて女中にたきつけとして焼かれ、ふたたびあらたに筆を起したカーライルの故事——のひそみにならいたいとは、戦災以来のわたくしの念願であった。

1955年(昭和30年)、アテネ文庫の『外来語辞典』をきっかけに、「シカが谷川の水をしたいあえぐように」(宮田幸一氏『教壇の英文法』1961, まえがき)、わたくしも、やっとまた、外来語の文献あきりにとりかかったのである。

本辞典を刊行するにあたって、わたくしは多くの方々に満腔の感謝を捧げなければならない。

1. 調査にあたって貴重な書籍や雑誌を貸してくださった方々、特に坂野明義氏
2. 不明の語について御示教たまわった方々、特に鶴見介登博士
3. 原稿を校閲してくださった畏友山中襄太氏
4. 原稿のコピーをとったり校正を手伝ってくれた妻雪子
5. 角川源義氏はか角川書店の方々、凸版印刷の方々
6. 身にあまるおことばの御序文をたまわった恩師金田一京助先生

などである。

本辞典はかような多くの方々の知力と労力の結晶でできたものである。

人間の力には限りがある。全力を尽したりとはいえ、未詳、不明の語も若干残り、大小の思わぬ誤りもいくらかあるにちがいない。

読者の方々、一つには老生後学のため、一つには我国の外来語学、国語学のため、御叱正、御示教を惜しまたまわざらんことを。

1967年(昭和42年)7月7日、古稀の誕生日に

あらかわ そおべえ

凡 例

編 集 の 方 針

1. 本辞典編集にあたっての基本方針を、自序からいくぶん敷衍して述べてみたい。

(1) 本辞典は著者の知識がありあまって人に教えたいから書いたものではない。著者自身がわからないために、たずねまわって研究してできあがったものである。

近頃の出版物は、週刊誌と同じく、よく言えば肩のこらないようなもの、悪く言えばあってもなくてもよいようなものが多いように見受けられる。また、すこしまじめなものになると、牧野富太郎博士がその名著『日本植物図鑑』で言っておられるように、他人の研究を借用しているものが、これまた多いようである。

わたくしは、僭越ではあるが、ひそかに本書によってまじめな学問のブームをひき起こすさがけとならせていただきたいと念じているものである。どうか真摯(しんし)にして、賢明なる方々に本辞典をご愛用願いたいものと念願する。

(2) 昨今、時々、外来語排斥の声を聞く。しかるに、日本民族全部が外来者であり、日本語は外来要素の混淆によって成立したものであると歴史は教える。従って、いままら外来語排斥はおかしいというのがわたくしの考えである。外来語というものは外国語が国語化したものである。つまり国語である。外来語を排斥するということは、とどのつまり、国語を排斥するということに帰するのではなからうか。

外国も外国人も、自分の国の国語を日本人に使ってくださいといっぺんも頼んだことも命令したこともない。日本人が外国語を使うのは、日本人の意志で、しかも外国には借用のお願いもお断りもせず、かってに使っているのではなからうか。外来語を使うのが万一悪いとしても、それは外来語自身が悪いのではなくて、外来語を使う日本人自身が悪いといわざるを得ない道理ではなからうか。

(3) 日本語はもっとも多く中国語(漢語)を輸入したために、ホモニム(同音語)の累積をきたし、ほとんど表音文字化を不可能ならしめている観がある。外来語はこの国語の混乱や不便を救う救世主である。一、二例をあげれば、死球と四球、賞牌(しょうはい)と賞杯、捕球と匍球、洋刀と洋燈などをみられたい。こんな例はあげよといわれれば無数にある。あわれな日本語ではなからうか。岡倉先生はかつて「文部省にむかって我等によき国語を与えよと要求したい」といわれた。

(4) 外来語は最少限借りた国と貸した国の2か国の共通語である。しかし、文明国ならばほとんど全世界に共通な語がきわめて多数ある。いわば外来語はさしあたってはワード

としては世界語である。

もし世界各国がおたがいに外国の長所や特徴のある語を外来語として輸入しあっておれば、ついにはすくなくともワードとしては全世界の語がただ一つの世界語になるであろう。例えば、ここに中身がそれぞれちがう数個のコップがあるとする。これをさじでたがいにあちらこちらくんでは混ぜあわせておれば、しまいにはどのコップの中身もみんな同じようなまざり物となるだろう。これとまったく同じ語である。（これは‘荒川の外来語世界語説’として、しばらくご記憶願いたい。）

だから、将来の世界語は外来語のもっとも多い国語に似たものになるであろう。現在、英語はもっとも多く外来語を含んでいる国語である。英語が世界で最も広く用いられている原因は、いろいろあるが、このこともその一因のように、わたくしには思えてならない。

2. 収録語彙について

本辞典に収録した語はすべてわが国のなにかの文献、あるいはそれに類するもの（広告や放送など）にあらわれたものに限定されている。しかもそれらは大衆性のあるもの、オーソリティのものを選んだ。すなわち、経典・法令・テキストブック・通俗専門書・教養書・文芸書・新聞・雑誌・現今通用の辞書・百科辞典などである。これらの総計数万語の中から、本辞典のため25000余語を選んだ。

分野は各般にわたるが、なかでも衣食住・娯楽・スポーツ・セックスなど万人の生活に関係する語は徹底的に網羅した。

固有名詞中、人名・地名は合成語をつくっているものとか（たとえばコロンブスの卵、ワシントン ハイツなど）、語原などを説明する（たとえば日光、満州など）ためのごとき特別のもののほかは割愛した。いっぽう、高山・名山・大河・名所・旧蹟・宮殿・社寺・大劇場・大博物館・船名・書名・新聞名など、特に文化に関係あるものは収録した。

DDT, TPO, BHC, PTAのようなイニシアル略語は重要なもの、または、目なれ耳なれしたファミリーなもののだけに限定した。

トレードネーム（商標名）には、トレードネームか普通名詞かちょっと区別のつかないものがままだ。もとはトレードネームでも、のちに普通名詞化した語は多い。例えば、コダック、シネマ、ナイロン、バーバリ、バリカンなど。だから、純粹のトレードネームでも、自動車、時計、カメラ、洋酒、タバコ、くすり、香水など、有名品は一般大衆にもファミリーであり、必要であるから、当然収録した。しかし、……ラインのように、シーズンごとに発表されてはうたかたのごとく消えていく商売上の標語のようなものは省いた。

日本語の外来語のなかには、クラクション、コンセント、スタンドランプ、ファンタジック、ランプスタンド、リクリエーションのように、原語とはちがった語、タイムリー

エラー、メータク、ラブロマンスのようにノンセンスな語、あるいはなくもがなの語もあり、しかもそれが最近ふえつつある。それらの語を追求・探索・研究することは嘔吐をもよおすほどいとわしく感じたが、しかし、現実を無視することは正しくない、本辞典はこれらをも如実に、綿密に収録した。その意味で、本辞典は日本語の乱暴さをも如実に反映している。本辞典において、はじめて採録された語は、けっして少なくないつもりである。

かくて、本辞典は、日本人の経験した有史以来現代までの生活・文化・社会ないし国際関係の、外来語によってあらわされ、外来語に残されたものは、力の及ぶかぎり見のがさない。ゆえに、本辞典にあらわれた語を総合してゆくと、日本の古今の生活史・文化史・社会史・現代の社会状態ないし国際状況を理解するための、有力な正確なサイドライトを投ずる資料となるものと考えている。

3. 原語について

できるかぎり正確であることを期した。前にも述べたように、外来語の多くは世界共通のが多いので、しいて一国語から借用したとすることはかえって誤りと思われるものも多い。たとえばアーメン、アンモニア、ガス、キリスト、ソーダ、バラスなど。

このばあい、原語多元説をたてて、同形の原語をいくつか並記した。

しかし、いっぽう、原語によって、語形のすこし異ったシノニムの外来語を生じたばあいには、綿密にそれぞれの原語をあてた。たとえば、ジュース、ゼウス、ツォイス／プラタナ、プラタナス、プラタヌ、プラタヌス、プラターネ、プラタン／ラビラント、ラビリンズ、ラビリント、ラビリントス／メーター、メーテル、メートル／リッター、リットル。

また、母語や祖語にさかのぼりうるものはつとめて記載した。

こうして、本辞典においてははじめて原語を発見したり、是正したり、されたものもけっして少なくないつもりである。

4. 語源の説明について

外来語と原語、語源の三者が、その意味を同じくするばあいは語源の説明はしないが、この三者、または二者間に著しく意味の相違があるときは、語源の説明をあげた。たとえば、アイヌ、イヌイト、オーケー、ガイ、カレンダー、グリヤ、ナイロン、ニコチンなど。

なお、PTAのような略字の語には、そのもとの綴り字をあげた。

5. 語義の解釈・説明について

親切・平易・正確・妥当・公正・精粗よろしきをうることに留意した。

また、生死・発明・発見・著作・初演・初登頂・成立・設立・解散・消滅・輸入・伝来などのデートを記入するよう心がけた。

同原・同義語・反対語・類義語・合成語など縦横にわたるクロス・レファレンスの記入につとめた。

また言語学的にみた正誤、注意書きも添えた。ニュースは正しくはニューズであるとか、

エレベーターは米語で、英語ではリフトということなど。

6. 出典・引用の文献について

これは富山房版と同じく本辞典の生命であり、最大の特色である。これは読者に古今の
おもしろい、また教訓的な読み物を提供するであろう。

この種の辞典に出典文献がなかったら、一文の価値もないことは識者の意見である。たと
えば、オープンの①の文献などは日本語の現状および将来をト(ぼく)するものとして、
千金の価値ありというべきであろう。またストレート、ブリッジ、ラブなどがいろいろの
意味に用いられることは、文献によらずしてどうしてわかるうか。またロイドめがねは文
献を見ずにどうしてその語源を決することができるか。

ちなみに、文献としての新聞は、保存されることがきわめてまれであるという欠点はある
が、しかし、新聞が大量のものであること、発行部数がいちじるしく多いこと、また、
発行の日に読者の目にふれるので、新語など普及した月日までわかるなどの利点をもって
いるので、おおいに価値があると思われる。

欲をいえば、動植物の学名、化学薬品の分子式、引用文献の出所のページ、イラストレ
ーションなどがいれたかった。おもしろい有益な引用文もかなり割愛せざるをえなかった
ことなど、もっとも残念である。

ここで、引用文献の著者・発行者の方々に対して、事前承諾を願わなかったことを深く
お詫びするとともに、ごらんのごとく悪質な盗用ではなく、一に典拠、名文としてむしろ
顕揚する意図のものであることを諒とせられ、快く事後承諾をたまわるよう、お願い申し
あげる次第である。

この辞典の使い方

1. 見出し語

(1) 見出し語の収録範囲とその扱い方

編集の方針でふれたように、時代的には古代、中世から現代のもっとも新しい外来語ま
で、分野からいうと生活・文化・社会・国際関係など百科万般に及び、また、死語・廃語・
専門語その他の特殊語も含め、およそ日本語の文献にあらわれたもので重要にして、かつ
身近なものを広範囲に収録した。

いちいちの語の取り扱いはいはば次の順序によった。

- a 見出し（必要に応じて副見出しを掲げる）
- b 原語・国籍
- c 言語学的説明・語源
- d 分類

e 語義の解釈・説明

f 参照語

g 出典・引用

(2) 見出し語決定の基準

前項の範囲内で、文献にあらわれた形に基づいて見出し語を定めたが、1つの原語に対して語形のゆれや表現のゆれによって、対応する語形や表記がいくつかあるばあい、原則として、それらの中から1つだけ選んで見出し語とした。

しかし、歴史的にみて重要と思われるものや、人によってそれぞれ用いられるというようなばあい、そのいずれをも見出し語として掲げた。

チとティ、ピとヴィのようなちがいは、チやピのほうを主とし、ティやヴィを従として、それぞれ主見出し、副見出しで掲げた。(10ページ別表参照)

(3) 見出し語の表わし方

- 1 外来語はかたかなで、日本語を含む複合語では、日本語の部分はひらがなで示した。
- 2 日本語を含む複合語では、日本語の部分には漢字表記をも示した。

アークとう〔灯〕

- 3 2語以上からなる複合語はわかち書きにした。

アイス クリーム

複合語がさらに別の語と結合して、別な複合語をつくるばあい、はじめの複合語はわかち書きしない。

アイスクリーム コーン

- 4 撥音(ン)、促音(ッ)、長音(ー)やその他の音節で省略できるものは()で囲んで示した。

コ(ン)ミュニケ キ(ッ)ス エアゾ(ー)ル アイデ(イ)ア

- 5 1つの語が2通りの言い方をもつときは、次のようにした。

バイオリン=ヴァイオリン (主見出し・副見だしのばあい)

テキスト ーテキスト。

(4) 見出し語の表記

文献にあらわれた形を尊重したが、基本の形をきめるにあたっては、1954年(昭和29年)3月国語審議会報告の『外来語の表記』を基準とした。

- i 撥音は「ン」と書き表わした。 テンボ
- ロ 拗音は小さく「ャ」「ュ」「ョ」を書き添えて示した。
- ハ 長音は「ー」をもって示した。 ボール オートバイ

なお、原音における二重母音の [ei], [ou] はおおむね長音とみなした。

エシヨール、メーデー

例外 エイト ペイント

ニ 「チュ、デュ」「ファ、フィ、フェ、フォ」「フュ、ヴュ」「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」「ティ、ディ」などは、原則として、それぞれ「チュ、ジュ」「ハ、ヒ、ヘ、ホ」「ヒュ、ビュ」「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」「チ、ジ」を主見出しとし、前者は副見出しとして添えて示した。

	主見出し	副見出し
イ — ウィ	スイッチ	=スウィッチ
カ — クッ	カルテット	=クアルテット
コ — クォ	イコール	=イクォール
チ — ティ	スチーム	=スティーム
ジ — ディ	ジレンマ	=ディレンマ
チュ — テュ	スチュワード	=ステュワード
ジュ — デュ	ジュース	=デューズ
ハ — ファ	セロハン	=セロファン
ヒ — フィ	モルヒネ	=モルフィネ
ヘ — フェ		
ホ — フォ	ホーム	=フォーム
バ — ヴァ	バイオリン	=ヴァイオリン
ビ — ヴィ	ビタミン	=ヴィタミン
ブ — ヴ	イブニング	=イヴニング
ベ — ヴェ	ベテラン	=ヴェテラン
ボ — ヴォ	ボルト	=ヴォルト
ヒュ — フュ	ヒューズ	=フューズ
ビュ — ヴュ	レビュー	=レヴュー

ホ 原音における [t] [d] の音は、まず「ト」「ド」であらわし、ときには「ツ」「ズ」であらわした。 ゼントルマン ドライブ ツリー ズック

原音における [tu] [du] は「ト」「ド」, 「ツ」「ズ」, 「トゥ」「ドゥ」などを慣用に從って用いた。

へ イ列, エ列の音の次の「ア」の音は「ヤ」と書かずに「ア」と書いた。

ピアノ ヘアピン グラビア

例外 ダイヤ タイヤ ベニヤ ワイヤ

ト x を「クサ、クシ、クス、クソ」と発音するばあいは、原則として発音どおりに書

きあらわした。しかし、「キシ、キシ、キス、キソ」が普通になっているばあいはそれに従った。 エキストラ

テキスト、テキストのようなばあいは両方とも見出し語としてかかげた。

チ 原語（特に英語）の綴りの終わりの -er, -or, -ar などは長音符号によって示した。

ライター エレベーター

例外 ドア

ただし、hammer, slipper などは「ハンマ(-)」「スリッパ(-)」とした。

リ 語末（特に元素名など）の -um は「ウム」とした。

アルミニウム ラジウム

ヌ 従来、原語の綴りにひかれて「ン」「ッ」を添えて書きあらわしたものは「ン」「ッ」を使わないが、慣用としてまだかなりつよく残っているものは（ ）で囲んで、両方あることを示した。 コ(ン)ミュニケ キ(ッ)ス

ただし、「ン」「ッ」を添えるのがふつうであれば、このかぎりでない。

シャッター バッター

(4) 見出し語の配列

1 見出し語は50音順に並べた。その中では清音・濁音・半濁音の順に並べた。

2 拗音・促音は配列のうえでは次のように扱った。

キャッチ → キャツチ フィット → フイツト

3 長音は「ー」（国語・漢語は「う」）で示したが、配列のうえでは、「ア、イ、ウ、エ、オ」におきかえたものとみなした扱いをした。

アー → アア キー → キイ

2. 原語・国籍

1 原語は国籍をそえて【 】の中に示した。

テーブル【英 table】

2 原語はローマ字で書きあらわした。ただし、中国語は漢字で書きあらわし、あわせて【 】の中にローマ字綴り（ウェード式）を示した。

シャオハイ【中 小孩 [xiǎo-hai]】

3 原語の国籍は次の26の言語については記号を用い、その他の国語や方言は一々省略しないでかかげた。

英 米 中 朝 満 独 仏 和 露 印 独 独 独

ポ ン 独 独 独 独 独 独 独 独 独 独

4 直接の原語からさらにさかのぼって、母語・祖語などを示すばあい、その関係を > で示した。

また、間接の原語＝祖語や、姉妹関係にあるものは（ ）で囲んで示した。

グラマー【(語) > 語 > 語 > 語】英 grammar】

インテレクチュアル【(語) > 語 > 語 > 語】英 intellectual,
(語) intellektuell】

- 5 見出し語の日本語の部分にあたる原語はイタリック体で示した。

アークようせつ〔溶接〕【英 arc welding】

- 6 日本語と外来語の複合語で、直接それにあたる原語をもたないばあいには、次のように示した。

あいコート【合＋英 coat】

あかチンキ【赤＋チンキ】

- 7 和製語は次のように示した。

イ 単語のばあい

ナイター【和 nighter】

カルケット【和 calcuit】

ロ 複合語のばあい

クリーム パン【英 cream＋髣 pāo】

ゴール イン【英 goal＋in】

- 8 見出し語がある語の省略形であるばあいには、原語を示さない。

プロ プロフェッショナルの略。

また、別項参照のばあい、原語が同じであれば、原語を示さない。

エクゾチック →エキゾチック。

3. 語源などに関する説明

見出し語に関する言語学的な説明や語源解説を《 》の中に示した。

- 1 原義：原語や祖語にまでさかのぼって、もとの意義を示した。

アイソトープ【(語) > 語】英 isotope】《原義：同じ位
置》……。

アンナプルナ【髣 Annapurna】《収穫の女神の義》
……。

- 2 原語の分解

アクアラング【英 aqualung】《語 aqua 水＋英 lung
肺》……。

- 3 語源解説

バスト【(語) > 語 > 語 > 語】英 bust】《原義：墓、胸像
が墓石の上に建てられることから》胸像。……。

4. その他、見出し語に関する必要な説明。

4. 分 類

専門語、特殊語その他必要に応じてその語の属する分野を『 』の中に示した。

人文科学・社会科学関係

政治、経済、法律、社会（社会学）、哲学、教育（教育学、教育行政など）、心理（心理学）、歴史、文学、美術（美学を含む）、言語（言語学）、音楽、宗教（仏教、キリスト教は除く）、考古（考古学）

自然科学関係

物理（物理学）、化学、医学、薬学、生物（生物学）、生化学、動物（鳥、魚、虫類を含む）、植物、鉱物、農業

技術関係

建築、鉄道、船舶、写真、印刷、園芸、電気、機械、土木

文化・社会生活関係

商業、放送、映画、演劇、テレビ、服飾（洋服、被服、服装などを含む）、美容、料理、舞踊

スポーツ関係

水泳、登山、野球、ソフトボール、バドミントン、ボクシング、レスリング、プロレス、ゴルフ、陸上（陸上競技）、テニス、卓球、バレーボール、バスケットボール、フットボール、馬術

その他

キリスト教、キリシタン、仏教、……神話

5. 語義説明

- 1 解説の記述には原則として当用漢字、新字体、現代かなづかいを用いた。ただし、必要なばあいには、当用漢字以外の漢字をも使用し、適宜（ ）の中に読みを示した。
- 2 一つの語で意味がいくつにも分かれるものは①②③で区分し、さらに細分するときは①②③をもつてした。
- 3 語義の解説にあたって、専門辞典や文献を援用したばあいは、／で区切って、文末には（ ）の中に引用文献をかかげた。

6. 参照語

見出し語と関係のある語を次の順序で示した。

変化形 同義語 反対語 関連語

- 1 変化形 =をもって示した。1つの原語がいくつかの語形をもつばあい、その中の1形を基本形として見出し語にかかけ、あとは変化形とした。

グラウンド グランド……………(1)

プディング プリン……………(2)

(1)のように基本形と変化形がさほどちがわないものは、基本形のみを見出し語にかかげたが、(2)のように両形のちがいが著しいばあいは、両形とも見出し語にかかげた。

グラウンド【英 ground】……、=グランド。

プディング【英 pudding】……、=プリン。

プリン →プディング。

- 2 同義語 ▷をもって示した。語形が似ていても、原語がちがえば別語とみなした。たとえばアクサン（フランス語）とアクセント（英語）、カリカチュア（英語）とカリカチュール（フランス語）。

- 3 反対語 ↔をもって示した。

アウト【英 out】……、↔イン。

アマチュア【英 amateur】……、略してアマ、↔プロ

フェッショナル。

イエス【英 yes】……、↔ノー。

- 4 関連語 →をもって示した。「……をも参照、参考されたい」というばあい。

7. 出典・引用

- 1 見出し語を採集した文献名や引用をかかげた。

- 2 ㊦印をもってはじまり、1つ1つの出典・引用は/記号で区切った。

- 3 出典・引用の内容はおおよそ次のようなものである。

イ その見出し語の説明を補うような内容のもの。辞典、専門書、実用書の例がおもである。

ロ その見出し語がはじめて日本語の文献にあらわれた年代を示すような例。（コーヒー、パンなどを見よ。）

ハ その見出し語の用い方を示すような例。

- 4 出典・用例は原則として次のような構成になる。

イ 引用 「 」に示した。引用を省略することもある。引用文の表記は、文語文はほぼ歴史的かなづかいで、当用漢字以外の漢字をも用いた。見出し語にあたる外来語の表現は出典の表記をそのまま用いたので、しばしば見出し語の表記と合致しないことがあるし、語形そのものが一致しないこともある。

ロ 編著訳者 日本人名は姓名とも、外国人は姓のみ示した。ただし、外国人名で同